

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2019年12月14日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、宇内梨沙		
検証テーマ：オリンピックのマラソンと競歩、オープニング、拉致問題、秋篠宮ご夫妻の沖縄訪問 北朝鮮が重大実験、【特集】中村哲さんが願っていたこと		
<p>報道トピック一覧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックのマラソンと競歩 ・オープニング ・奈良県橿原市の放火殺人事件で不明の男性が福岡のネットカフェ利用か ・東京青梅市で殺人事件 ・新潟県魚沼市で自宅前の路上で母親の車に轢かれ1才児死亡 ・拉致問題 ・秋篠宮ご夫妻の沖縄訪問 ・中国の冬季オリンピックの会場が一部公開される ・北朝鮮が重大実験 ・泉岳寺で赤穂義士祭 ・千葉 Jr アイスホッケーチームに支援の輪が広がる ・【特集】中村哲さんが願っていたこと ・【特集】検証！千曲川の堤防決壊 ・スポーツ 		
<p>放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックのマラソンと競歩：結論→特に問題なし <p>オリンピックのマラソンおよび競歩について以下に朱記したようなVTRで伝えられた。</p> <p>ナレ「今日、札幌で顔を揃えたIOCと世界陸連、組織委員会の担当者、東京オリンピックのマラソンコースの決定に向け市内を視察しました。」</p> <p>秋元克広（札幌市長）「たいへん驚いていると同時に光栄だと。」</p> <p>小池百合子（東京都知事）「あえて申し上げるのなら、合意なき決定でございます。」</p> <p>"ナレ「二ヶ月前、暑さを避けようと突如浮上した東京オリンピック、マラソン・競歩の札幌開催、正式決定したのは今月4日で本番まではわずか8ヶ月、コースについてもIOCと高い組織委員会は一週目を20キロとすることで合意をしましたが、決まらないのは2週目以降です。組織委員会は警備を効率的に行うため、二週目を一周目とほぼ同じコースにすることを提案、大して世界陸連は短いコースを周回することで記録が出やすい7キロのコースを参集する案を主張しています。また組織委員会は10キロのコースを2周する折衷案を世界陸連に提案しています。開催地の札幌も準備は待ったなしです。マラソンでは選手が怪我をしないよう路面の整備が必要ですが、雪が積もる札幌では春になると道路のわだちやひびが目立ちます。例年雪解け後の6月から8月に道路補修を行います。来年は6月の世界陸連の最終チェックまでに作業を終えないといけません、札幌市はコース決定を待たずに道路の調査を開始、今月の議会では工事費用7億円を補正予算に盛り込みました。ただ、組織委員会</p>		

からは路面の補修の明確な基準はまだ示されておらず、市の職員は手探りで点検を進めています。」

中谷裕二（札幌市道路維持課計画係長）「車の目線で路面管理をしているので人が走るとなるとちょっと普段とは違う見方をしないといけないと思います、組織委員会と話ししながらレベルは決めていきたいな、と。」

ナレ「組織委員会は年が明けた来月、地図上で、コースの仮計測を行う予定ですが実際の道路上での測定は雪が溶けた後の4月になる予定です。世界のトップランナーが札幌を駆け抜けるまで8ヶ月、組織委員会は今日の視察を受けて来週にも最終的なコースを固めたい考えです。」

このトピックに当てられた時間は181秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・オープニング：結論→特に問題なし

番組のオープニングで金平キャスターが「アフガニスタンで凶弾に倒れた医師中村哲さんは生前なぜ支援するのか問われて、皆が泣いたり困っているのを見れば誰だってどうしたんですか、と痛くなる、そういう人情に近いものです、と語っています、人情という柔らかな言葉が今、心にしみます、特集で中村さんが残したものを考えます。」とコメントしていた。このシーンに当てられた時間は21秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・拉致問題：結論→特に問題なし

膳場キャスターの「北朝鮮の人権侵害問題啓発週間に合わせて開かれた政府主催のシンポジウムで菅官房長官は政府の最重要課題として拉致問題に取り組む考えを強調しました。」とのコメントを受けて、以下に朱記したVTRが取り上げられた。

菅義偉官房長官「全ての拉致被害者の一日も早い帰国を実現すべく政府の総力を上げて最大限の努力を続けております。」

ナレ「菅長官は被害者も家族も高齢となる中、もはや一国の猶予もないと述べるとともに、引き続きアメリカなど関係国との連携を深める考えを示しました。」

"ナレ「一方、新潟県佐渡市の拉致被害者、曾我ひとみさんは署名活動を行い一緒に拉致されまもなく米寿を迎える母、ミヨシさんの救出を訴えました。」

曾我ひとみさん「お祝いどころか、そばにもいってくれず。本当に心が痛みます。」

ナレ「曾我さんは政府は今まで以上に全力で取り組んでほしい、と話しました。」

このトピックに当てられた時間は131秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・秋篠宮ご夫妻の沖縄訪問：結論→特に問題なし

日下部キャスターの「秋篠宮ご夫妻は全国育樹祭などに出席するため、沖縄県を訪問されています。」とのコメントを受けてVTRが取り上げられるとともに、ナレーションによって「一泊二日の日程で沖縄県入をしたご夫妻は午後3時過ぎ、糸満市の平和記念公園にある国立沖縄戦没者墓苑を訪問されました。ご夫妻は納骨堂の前にゆっくりと歩み出ると供花台に白い菊を供え沖縄戦の戦没者を追悼されました。秋篠宮様は家族を沖縄戦でなくし、現在、語り部として活動している遺族に対し、自分も子どもたちには戦争の話をしています、と言葉をかけられました。その後、ご夫妻は同じ糸満市の沖縄県平和創造の森公園に訪問し、在位中の上皇ご夫妻が26年前に植えたリュウキュウマツとフクギの枝打ちをしたり肥料を与えるなどして手入れをされました。」と伝えられた。このトピックに当てられた時間は59秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・北朝鮮が重大実験：結論→特に問題なし

膳場キャスターによって「次です、北朝鮮が再び重大な実験を行ったと発表しました。北朝鮮の国防科学院は北西部にあるソヘ衛星発射場で昨日夜、重大な実験がまたもや行われたと発表しました。最近、次々と成し遂げている研究成果は戦略的核戦争抑止力を一層強化することに適用される、としています、北朝鮮は7日にもこの施設で重大な実験を行ったとしていて、ICBM 大陸間弾道ミサイルなどのエンジン燃焼実験を行った可能性があると見られています。」とのことが伝えられた。このトピックに当てられた時間は39秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】中村哲さんが願っていたこと：結論→特に問題なし

膳場キャスターの「特集です。アフガニスタンで、凶弾に倒れた医師の中村哲さん。今週の水曜日、告別式が営まれました。」とのコメントに金平キャスターが「えー35年にわたって、現地で医療や灌漑事業に取り組んできた中村さん。その中村さんの平和への思いを考えます。」と応えた後に、以下に朱記した特集のVTRが取り上げられた。

金平「中村哲さんの葬儀が間もなくこの会場で営まれることになっています。祭壇の中央には、菊の花に囲まれた中村さんの遺影があります。その前に棺がありますが、アフガニスタンの国旗に包まれています。」

ナレ「NGO ペシャワール会現地代表で、医師の中村哲さん。73歳。今月4日、アフガニスタンで移動中に銃撃され、死亡した。これまでに複数の男が逮捕されたが、犯行の動機など事件の背景は分かっていない。」

ナレ「故郷、福岡市で行われた告別式では、1800人以上が参列した。」

金平「中村さんの出棺を見守ろうと、今、葬儀場の前にはですね、たくさんの人々がまあ待ち構えているところですけど、アフガニスタンや、パキスタン、ナイジェリア等からの人々も葬儀に参列していました。先ほどまで、葬儀に私も参列してたんですけども、棺の中の中村さんの表情は、深い安らかな眠りに落ちているようでした。」

金平「出棺です。中村さんの棺を乗せた車が今出ています。手を合わせる人と、拍手が沸き起こっています。」

ナレ「参列者は、」

アフガニスタン出身・レシャード・カレド医師「悲しさだけ。本当に。むなしさ。あんなに頑張っていたのに、最後はこんな形で亡くなるなんて。今までは中村さんが、向こうに行って、つながりを作っていたの、それをどういう形で継続していけるのかということなんです。」

"パキスタン出身 フユマン・ムガールさん「中村先生はパキスタンでも、ものすごく、感謝されて、みんな私たちパキスタン人たちもすごい悲しんでいます。先生は人にね、命の水を与えた人じゃないかと。水路を作ってですね、水は、感動した言葉の中で、水は善と悪を判断しないで、みんなに命を与えるんだと。そういう使命でですね、先生は現代の日本のクライストじゃないかと思うんですよ。」"

ナレ「アフガニスタン出身の留学生 グラブ・グルブディンさん。東京農業大学で、収穫した野菜や果物を、長持ちさせる技術について、研究している。」

グラブ氏（吹替）「我々の国には、長期保存できる設備がないので、違う方法を研究しています。それが、『高温保存』です。トマトなど収穫した野菜や果物のロスを減らすことができます。」

ナレ「6年前に家族とともに来日したグルブディンさん。きっかけは、中村哲さんとの出会だった。」

グルブディン氏（吹替）「中村先生に会いに何度も現場に行きました。」

グルブディン氏「中村先生が、良かったですね。頭が良かったです。」

ナレ「干ばつで、農業ができなくなり、食料の確保が難しくなっていたアフガニスタン。」

中村さん「私たちは医療が仕事ですけども、これはこの、飢えや渇きというのは、薬では治せない。地獄という感じだったですね。」

ナレ「現地で、貧しい人たちに診療していた中村さんは、『100の診療所より1本の用水路を合言葉に、用水路の建設に取り組んだ。』

グルブディン氏（吹替）「この地域は、完全な砂漠地帯でした。水が一滴もない状態の中で、このプロジェクトはスムーズに進まず、難航することも多かったです。」

ナレ「厳しい環境の中でもあきらめない中村さんの姿に、現地の人々は、心を打たれたという。」

グルブディン氏（吹替）「プロジェクトに初めて参加するような人は、中村先生がどの人か、見分けることができませんでした。監督としてではなく、労働者みたいな働きぶりだったからです。そんな働きぶりが村の人々を動かしました。」

ナレ「その後、用水路が完成。荒れ果てていた大地には、緑が戻った。」

グルブディン氏（吹替）「この水路のおかげで、1万6500ヘクタールの砂漠が肥沃な農地に生まれ変わりました。」

グルブディン氏「このへんたくさん農業あります。ごはんあります。」

ナレ「中村さんの悲報を聞いたグルブディンさんは、遺体が帰国したとき、成田空港に駆け付けた。」

グルブディン氏（吹替）「アフガニスタンの人たちは、中村先生を尊敬し、愛しています。国のために尽くしてくれました。今回の事件には、みんな心から悲しんでいます。」

ナレ「悲しみが広がるアフガニスタン。グルブディンさんの友人に、話を聞くと、」

グルブディンさんの友人（吹替）「私たちは、中村先生という家族の一員を失くしました。中村先生の活躍が、アフガニスタン人の心に永遠に残るように願っています。そのため、地域ごとに学校や診療所を中村先生の名前に変えています。」

ナレ「グルブディンさんは、来年3月に帰国する。」

グルブディン氏（吹替）「中村先生の遺志を引き継ぎ、アフガニスタンをより豊かにし、人々を再び、団結させたいと思います。中村先生は、後20年はこの事業を続けたいと、いつもおっしゃっていました。だからその意志を引き継いで、我々は活動をやめずに、両国の友好関係が永久に続いていくよう、望んでいます。」

男性「お盆ぐらいだったかなあ、ちょうど夏ぐらいに・・・私も後で聞いたんです。先生はここに3日間、通われてたそうなんです。」

ナレ「福岡県朝倉市に住む、徳永哲也さんは、筑後川の、山田堰土地改良区の理事長を務めていた。中村さんは、ここを何度も訪れて、取水堰の技術を取り入れて、アフガニスタンで建設してきた。今年4月、徳永さんは、国連の事業で、農業指導員として、アフガニスタンを訪問。中村さんにも会った。これはその際の映像だ。」

徳永さん「まさに、アフガン復興のモデルとなったこの地を、立って、今、感極まりない状況です。」

徳永さん「先生やっぱりすごい。どうもこうもこれはすごいことですよ。」

中村さん「離れられないですよ。なかなかね。」

ナレ「用水路の建設現場では、」

徳永氏（映像）「大小がうまく、」

中村さん「これに勝るものはない。家の礎石なんかご覧になったでしょ。鍛えてるから、上手なんですよ。」

ナレ「映像には、中村さんが、自ら重機を使って作業を行う様子も。」

徳永さん「これでは太陽の光が下の方には、当たりません。」

中村さん（アフガン語）「サイエジータ。ドゥムロナーラジ。」

ナレ「徳永さんも、ミカン栽培の剪定の指導などにあたった。」

徳永さん「作業をされている人たちってのも、とにかく一生懸命。頑張られてるっていう姿が分かるの。うん。」

だからこれだけ、早い復興と、水路づくりができてきたと思うんですよ。だから今まで培ってきたやっば10何年のノウハウってのがもう、大体確立されてる。早いスピード感を持った復興がですね、次の10年、20年にはできるってことでですね、非常に私も期待してたし、先生もそう言う風に思われたと思うんです。」

「おう、ああここが、山崎さんこっちがもっといいわ。先生。今この地に時々立たれて、見られるけど、やっば少しずつ景観が変わってますか？」

"中村氏「変わってますね。こないだ行った砂丘が、丘があったじゃないですか。あのミズ炭鉱の。あそこがですね、もう、立って見えませんも。」

男性「あー」

中村氏「丘そのものですね、緑に包まれている。あそこですね。この数年間ですね、砂嵐が全く来ない。本当に来ない。風は吹くけど、来ない。」

ナレ「現地で、中村さんと過ごせた自分だからこそ、やるべきことがある。徳永さんは、強く決意している。」

"徳永氏「まあ先生と今年行って、あと5年後、まあ77になるんですが、あと5年後先生、また5年後にはぜひ、訪れたいってことで、そういう約束してですね、それがもうたまらないんですよ。」

徳永氏「まあ、どういうふうになるか分からんが、とにかく私たち、精いっぱい、アフガニスタンの復興のために、先生の志を成し遂げたい。っていうふうに思っております。」

ナレ「中村さんの中学時代の友人。和佐野健吾さん。」

和佐野氏「年明けにはだいたい現地に、戻ってたので、はい。彼は律儀ですよ。どんなに忙しいなかでも、こんなにならず、年賀状なんかも返してましたからね。」

ナレ「キリスト教系の中学校で、3年間同級生だった。教会でのさまざまな人との出会いが、中村さんに影響を与えたと話す。」

和佐野氏「岩村先生っていう先生がおられて、パキスタンかな。で、医療をされてた方がおられたんですよ。岩村だったと思いますね。で、そんな先生たちがチャペルに来て、話されるんですよ。もうたくさんの人たちが協会に来てたんです。若い人たちが。だからそういう交わりの中で、たぶん彼は、いろんなことを、学んだんだろうなと思いますね。」

ナレ「その後、医師になり、ペシャワール会の活動を始めてからは、和佐野さんに愚痴をこぼすことも。」

和佐野さん「アフガンの人達は一生懸命自分たちのために頑張ってくれた人を一こういってますけど、そんな人ばかりではないので、あの言っていましたけれど、いい人もいるけど、悪い人もいるんだ一って、日本もそうだって。どこでもそうなので一っていうことをいつも言っていましたからね。」

ナレ「帰国した際には、母校をたびたび訪れていた中村さん。子どもたちに、こう語りかけていた。」

和佐野さん「やっぱりこう、平和の大切さ。まあ、平和っていうのは何かって、言ったら、まずやっぱり食べるものがあって、家族みんなが一緒に生活できること。もうそれが大切なんだと。3度3度ご飯が食べられて、家族と一緒に生活ができること。これが基本だよ一っていうことはいつも言っていましたね。」

ナレ「2001年のアメリカ同時多発テロの後、アメリカは、テロとの戦いを宣言。日本では、自衛隊の海外派遣が議論されるようになった。アメリカは、アフガニスタンへの空爆を、開始。そのさなかに、国会に参考人として呼ばれた中村さんは。」

"中村さん「自衛隊派遣が今、取沙汰されておるようではありますが、」

中村さん「当地の事情を考えると、有害無益でございます。」

ナレ「イラクへの自衛隊派遣が国会で議論されていた。2003年。中村さんは、こう語っていた。」

中村氏「一つの国が軍隊を動かすというのは、大変なことなんですよ。その重さというか、怖さというか、それ

を本当に知っているのか。あんな決定を簡単にする人たちは、実際に弾の下をくぐったことが無い人たちですよ。」

金平「「あーこんにちは。」

ナレ「2014年。安倍内閣で安保法制が議論されていた際にも、私たちは中村さんにインタビューをした。」

金平「集团的自衛権の行使を容認するために、こう、憲法解釈を変えようというような形で、物事をどんどんどんどん、こう、物事を進めているというような状況ですね。」

中村氏「安倍さんが言っているような、集团的自衛権の行使というのは、既にアフガニスタンでこの10数年実験済みなんですよ。実験という言葉は悪いんですけども、その結末が今なんですね。イラクと似たような経過をたどっている。邦人の身を守るというけれども、かえってその、今までその、日本人だけはやられなかったんです。それは『戦はしない』という国是といいますか。割とみんな了解しているんですね。それが日本人であるからというだけで、攻撃される。こういう事態が発生しうるといえるか、確実に発生します。」

ナレ「特に危惧していたのは、駆け付け警護だ。自衛隊のPKO活動で、離れた場所で襲われた民間人などを助けに行く任務だ。これが実施されると、NGOの活動に、支障をきたすという。」

中村氏「NON GOVERNMENT ですから、時には政府と、異なった方針で活動方針で、活動するというのが、NGOの良さでもあるわけで、政府にはできないけれども我々には、できますよといってですね、それさえもダメにしてしまう。」

金平「アフガニスタンに戻られるわけですけども、これだけはどうしても言っておきたいというのは、どう？」

中村医師「アフガニスタンは、もう戦どころではない状態。戦で物事が解決できないというのを住民が、身に染みて知ってるわけですよ。それよりも怖いのは、彼らが生きていく、空間。即ちその農民が生活する農地がですね、年々砂漠がどんどんどんどん失われていってるといえること。我々が目指しているのは、気候変動の中でも、食っていく手段はあるんだと。それがその地域の死命を制するような事業をですね、つまらないその政治的な動きによって、つぶれるというのは、耐え難いですね。」

ナレ「中村さんの告別式の翌日、会見したペシャワール会。事業を続けていく考えを、明らかにした。」

金平「葬儀を終えられてですね、たくさんペシャワール会。並びに支える人たちがすごい数いらっしたですよ。受け止め、みたいなものについては。」

ペシャワール会 村上優会長「言葉にならないぐらいの悲しみと、あと、喪失感。それはもう言葉になりません。」

ナレ「中村さんは、亡くなる18日前、山口県の大学で、講演し、こう語っていた。」

中村さん「赴任から、私の赴任から35年。ハンセン病から始まって、さらに地域の農村医療。それから農村医療から干ばつ対策。干ばつ対策から今度は温暖化対策というような形で話が大きくなって行きましたけれども、そうしないと地域の人々が生きていけない。命を預かる者の責任の一つとして、この仕事を息がづく限り続けまして、私たちは、人間と自然がいかに折り合っていくかという道をですね、たどっていこうというふうに思っております。」

特集のVTRを受けてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り広げられた。

膳場「中村さんの歩いていらした道や、発してきた言葉の一つ一つに本当に、胸が詰まるような思い。悲しいんですけども、金平さん告別式にね参列されましたよね。どんな様子でしたか。」

金平「あの、まず、文字通り会場からあふれんばかりの人たちが押しかけてですね。それでもう、祈ってましたね。ほんとに死を悲しんでたんですけど、弔辞を述べた在日本のアフガン大使の方がですね、中村さんを守れなかったことを申し訳ないというふうに泣きながらこう、弔辞を読んでましたね。あの最後にご遺族の代表として長男のへんさんがですね、語ったんですが、一番最初に語ったことがですね、えー中村さんとともに、命を落としたアフガニスタン人5人の方の、家族、それから5人の家族の方々に、申し訳ない気持ちでいっぱいです。あ

たま下げてましたですね。それからその父親との思いを語ったんですけども、切々として語ったなかにはですね、出かける、アフガンに出かける前の二人の会話のときには、お母さんをよろしくって言う風に、お母さんを頼むっていったような話をきいて、それから、口先だけじゃなくて、行動で示せというように、言ってたっていうんですね。で、けんさんはそれを、自分の今後の指針にしたいというようにおっしゃってましたですね。」

日下部「考えてみると、中村さんは亡くなったけれども、本当に多くの人の中に種を巻いたんだと思うんですね。まあそういう意味で、中村さんは、生き続けるわけですよ。」

金平「まあその、証の一つかもしれないんですが、あの中村さんの骨は分骨されてですね、一部がその、アフガンで、緑化したその砂漠の地に埋められることが決まっているそうです。中村さんは本来、まあ、クリスチャンでは、あるんですけども、僕は NHK の番組で見たんですけどね、あの緑がよみがえった村にモスクを立ててね、その開所式のテープカットのシーンがあったんですけども、テープカットのシーンの時間に、中村さんは、アーメンって言って、小さい声で言ってましたですね。そういう宗教の違いをこう超越するような生き方をされてただな一っていう。で遺された私たちはね、中村さんの偉大な功績からこう、聖人化するんじゃなくて、あの中村さんの大好きな言葉の僕は「一隅を照らすって」僕は、仏教の最澄の言葉ですけども、自分の役割、役割を果たすってことが、中村さんの残したものに報いることになるんじゃないかって思いましたですね。」

この特集に当てられた時間は 1404 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特に問題なし

検証者所感

特になし